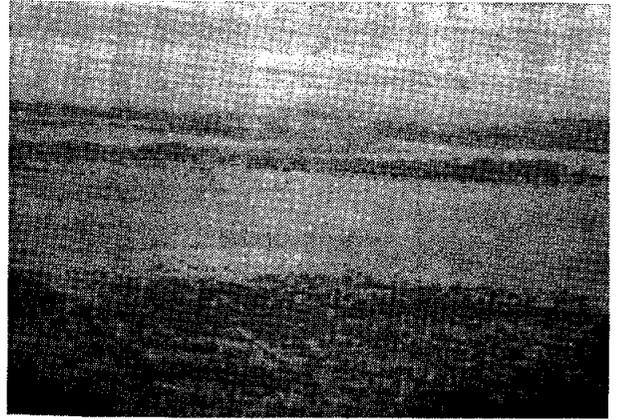


# 釧路湿原の植生と植物景観

田 中 瑞 穂



釧路湿原西部

一、釧路湿原を特色づけているものとしては、特別天然記念物タンチョウの生息ということ以外にたくさんあると思われるけれども筆者は、別の紙面に湿原への視点を次のように取ってみたことがある。そこでは左記のように項目を

⑥ 二〇万都市のいわゆる都市域に含まれ、人間と自然とのかかわりが強調される都市社会的な、環境科学的な系列に立つ視点

このようなとりあげかたは多分に主観的な、あるいは独断的なそしりは免かれないがこれらが一体となって今日の釧路湿原の大きい評価につながっているものと考ええる。しかも全部が集約されて「自然」という言葉ではねかえってくるのが、この湿原だといったような気持を持っている。

二、生物学的な目からこの湿原を見ると、まず湿原の生態系に関する事柄が注目を引く。とくに、より北方からの不連続分布種（隔離分布種）を含んだ多分に北方的な生態系のなかに注がれるわけである。タンチョウやキタサンショウウオ、エゾカオジロトンボなどの生息は、この面で特に重要な存在になる。湿原の周囲は三方が海岸段丘、一方が海岸砂丘で囲まれる形をとっている。地勢のうえからも周辺から隔離された自然のように思えるが、気候や気象の面からの諸要素をふまえてみたときに、隔離あるいは不連続という事柄はさらにはつきりする。すなわち、雨量指数で示される「暖かさ」という点をとり出しても、帯広が五八・〇となるのに対して、釧路は四六・四となるように、わずかに百キロ余をへだてるだけで中間に大きい断層でも介在するような暖かさの不連続が認められるのである。いいかえれば、暖かい内陸の丘陵地にとり囲まれる形をとりながら、思いのほか冷たい自然が湿原の形状で位置しているのである。

このような性状の釧路湿原を直視して、生態系の底辺を構成する植生について、その概要を記してみたい。なお、周辺の波状丘陵地や海岸砂丘地を含めてみれば七〇〇種は

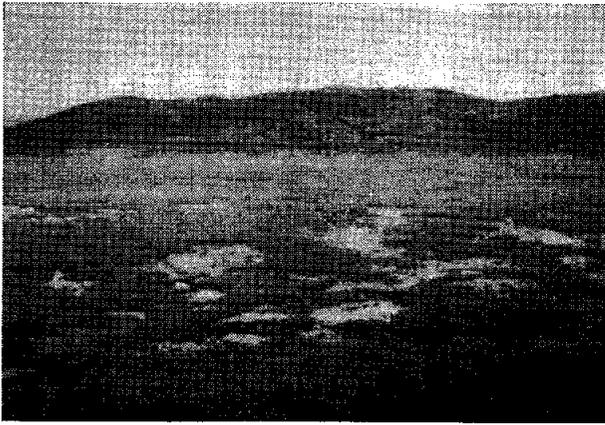
あげていった。

- ① 厚く堆積する泥炭の層や泥炭中の花粉などを通して、湿原の生成を過去にさかのぼって見る地史的な視点
- ② タンチョウ、キタサンショウウオ、エゾカオジロトンボ、クシロハナシノブなどの隔離的な生息・生育が特筆される動植物の分布の面からの視点
- ③ 低層湿原や高層湿原を含めて八自然度10Vというようなマクロの表現でとらえられる植生学的な視点
- ④ 湖沼、河川、海岸段丘など湿原の全体像についての地形・地質学的な視点
- ⑤ 群落の更行や、動植物間の連鎖、湿原の生態系などにかかわる生態学的な視点
- ⑥ 原始河川、原始景観などの表現で評価される地誌学的な系列に立つ視点
- ⑦ 周辺丘陵地の豊富な遺跡群に傾斜して湿原の過去を摸索する先史学、考古学的な視点

どの植物が見出されるけれども、湿原の部位に限っていえば約二〇〇種になる。

三、現在まで四〇〇〇年といわれるような長い生成の過程を考えながら植物群落の変遷を推測してゆけば、第一に豊富な水生植物群が大きい役割を果たしてきたものであらう。湿原の東縁には現在も塘路湖、シラルトロ沼、達古武沼の三大湖沼が残っているし最大の高層湿原が構成されている湿原の北西寄りには長径四三〇メートルの赤沼と呼ばれる大型の沼も残されている。塘路湖の最深部で七メートル八メートルの水深が測られるのを除いては、全般的に二メートル以下になっている。水生植物が水深の変化に応じてその種類を交代させていることは本湿原の池沼の場合も同様で、図式的には沈水植物↓浮葉植物↓挺水植物とたどってゆくこともできる。

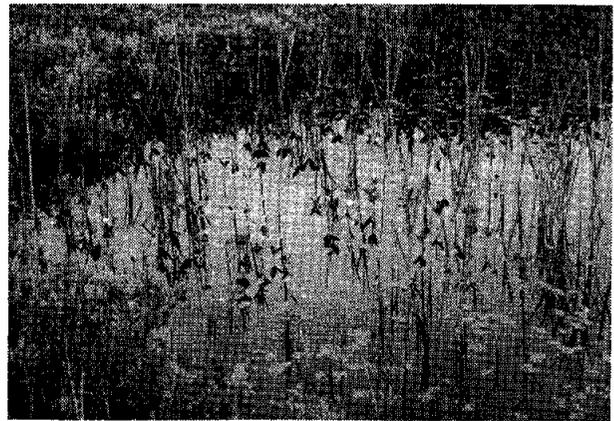
これらのうち、沈水植物にはタヌキモ、センニンモ、イトモ、エゾヤナギモ、ナガバエビモ、ヒロノエビモ、マツモ、ホザキノフサモ、クロモ、セキシヨウモ、ヒンジモ、エゾノミズタデなどがあって、前述の大型湖沼ではセンニンモ、ヒロハノエビモ、湿原



鋼路湿原東部の池塘群

内の小池沼ではタヌキモがもっとも多い。

つぎに浮葉植物は池沼の景観を特色づけるが、その中で古くから広く知られているのは塘路湖のオニビシ、秋季には水深四メートル内外からより水深の浅い湖面上にかけて広くおおいつくすような勢いを見せている。このオニビシは湿原内の赤沼などにも生育しているけれども、多くの池沼に共通してもっとも優占的地位を占めるのはネムロコウホネで、オヒルムシロがこれにつぎ、エゾヒツジグサ、ホソバヒルムシロは、比較的少ない。



池塘の植物

マコモ、ガマ、キタヨシ、フトイ、ミズドクサ、ミツガシワなどで代表される本湿原の挺水植物は池沼のもっとも岸寄りに位置し、中央部の開水面や浮葉植物で占められている水域をとり巻くように生育するので、ミズドクサ、ミツガシワなどが同心円状の配列を見せる場合もある。ここで見られる沼沢地から湿原への移行は、傾きが緩やかな場合は上述のミズドクサ、ミツガシワからヤラメスゲを経てキタヨシ、スゲ類につづいてゆくのが普通のように思われるがこのスゲ類の群落にはヤナギトラノオ、アカネムグラ、エゾミソハ

ギ、サワギキョウなどが混生する場合もある。

流水の見られる小河川などではこれらとは別に、スギナモヤバイカモ、ミクリ、タマミクリ、ドクゼリ、ヌマゼリなどを見ることがもできる。

このように現在でも湿原の各所で小さい枝川が寸断され、さまざまな水生植物におおわれている状況をうかがうことができるのである。

四、鋼路湿原のもっとも大きい特色の一つは、現在でもその大部分が低層湿原を構成していることである。小規模な低層湿原であれば、さまざまな地方の低地でも見られるから決して珍しい植生ではないけれども、このように三〇〇〇〇ヘクタールに近いような広大な湿原の大部分を占めるといふことは、植物学的にも注目を引くものである。もちろん、わが国で最大の低層湿原である。従って景観のうえからは、特に夏季においてはキタヨシ・スゲ類の群落として一括することも可能ではあるけれども、過去にくり返された流路の変更や原始河川の跡地、池沼からの陸化年代の差違、場所による泥炭の



川を流れる湿原

厚さや地下水位の違い、海拔高度のわずかな勾配、排水溝の設定などによって、植物の生育環境は必ずしも同じ状態にない。植物群落もある程度多様である。

大小のヤチハンノキ林が不規則に望見されるのもその一つで、ごく背丈の低い幼樹林のほか低木林、高木林と区別できる状態にもなっているが、その中には樹高一四〜一五m、樹令五〇〜五五年がもつとも大きい計測値になる。また湿原の内域に成立している林は、抛水林を除いてはほとんど全部といって良いほどヤチハンノキの純林である。

ヤチハンノキ林の林床も含めて、低層湿原の草本植生は前述したようにキタヨシ、スゲ類の群落におおわれることは衆知されているが、湿原の周辺域や、沢沿いの地域ではヒラギシスゲやカブスゲ、内域ではムジナスゲやピロードスゲが顕著である。そのうえどの種類のスゲ類もキタヨシに比較して葉の伸長、展開の時期がかなり早いため、初夏の季節の低層湿原はこれらスゲ類によって広くおおいつくされて、相観としては非常に単純である。ただ、ヒラギシスゲやカブスゲの仲間はその形状から一般に谷地坊主と

いう呼び名が与えられているように、スゲ自体がかなり大きい隆起叢株になるほか、広い範囲にわたってかなりの密集団をつくっている場合が多い。それが非常に特異な景観を呈することになる。五〇センチメートルをこえる高さになるけれども、この現象は多年にわたるスゲの生長や、叢株周辺の土壌の流亡などに生成の原因を求めることができる。

このような初夏のスゲ湿原も、やがて夏の到来とともにキタヨシに置きかえられてゆく。すなわち地温の上昇とともにキタヨシが急速に伸長してスゲの上層に茎葉を

展開し、しかも密生するので、まったくキタヨシ湿原に変容してしまう。いわゆるヨシ原である。

このほか地下水位が低く、やや乾燥に傾いているところでは、イワノガリヤスがよく生育する。湿原の中の河川の汎氾原などは特にそうである。この種もよく密生するので花期になれば、花穂の色をもとに遠方からでもその生育域を確かめることができる。

このように剣路湿原のいわば基盤の植生は、キタヨシ、叢株構成のスゲ類（ヒラギシスゲ、カブスゲ、その他）、叢株を構成しないスゲ類（ムジナスゲ、ピロードスゲ、その他）、イワノガリヤス、それにヤチハンノキが加わってできている。そのほかごく普通に混生しているものとして、ナガボノシロワレモコウ、コガネギク、アカネムグラ、タチギボウシ、サワギキョウ、ヒメシダ、コウヤワラビ、エゾノレンリソウ、クサレダマ、ヤナギトラノオ、ヒメイチダ、ホソバノヨツバムグラ、アキノウナギツカミ、エゾノシモツケソウなどをあげることができる。

しかし、ここで特に記しておきたいのは、河川流域にできている各地の小さい低層湿原と違って、これだけの広さに展開していることの意義についてであって、それは四〇〇年近い年月をかけ、まったく自然のままに推移して現在の湿原にいたったその植生の貴重さでもある。過去の川すじの跡が曲折したまま残っていたり、海成湖沼がそのまま残されているような事例を考慮すれば、この広い低層湿原の中には湿原植生の原型ともいべきものがいくつとなく収められているとしても、決して言い過ぎにはならないと考へたりするからである。

一九七四年に開催された国際植生学会東京大会の総会の席上で、剣路湿原での事前エクスカーションの調査結果をもとに、特に「剣路湿原の保護」ということに言及している点を尊重してほしいということもつながってくる。

五、低層湿原に比較して、はつきり中間湿原とされているところは少ない。それは低層湿原の区域が広いので、低層湿原の中でも高層湿原への方向に推移してきて、かなり中間湿原の性状に近いところが多いけれども、たとえばホロムイツツジやヤチヤナギ、ヤマドリゼンマイ、ワタスゲなどが侵入し、ミズゴケ類もわずかに見られる状態の地域は各所にあるけれども、イボミズゴケやムラサキミズゴケの発達も顕著でなく、ヌマガヤも少ないので、大半は低層湿原としてとり扱われているのである。

従って、現在では数カ所の狭い範囲にヤチヤナギ・イボミズゴケ群落という形で中間湿原が取り出されるにとどまる。ここではイボミズゴケを基盤にして、ムラサキミズゴケ、スマガヤ、ヤチカワズスゲ、ホソバオゼヌマスゲ、ツルコケモモ、ホロムイソウワタスゲ、ヒメワタスゲ、ヤマドリゼンマイ、ヒオウギアヤメ、トキソウなどがヤチヤナギ、ホロムイソウツジに混生するので、キタヨシ・スゲ類で示された低層湿原の種類組成と比較すれば、はつきりした差違を見せている。

六、湿原の植生の中では、高層湿原に対する関心がもっとも大きい。それは植物にとつて非常に限定されている生育環境ということからミズゴケの生育が著しくなつて次第にミズゴケ丘をつくりあげてゆくので、隣りのミズゴケ丘との間が相対的に凹地となつて水をためていることが多い。このため地表はまず凹凸の連続になつてそれまでの比較的平坦な植生、しかもほとんどキタヨシ、スゲ泥炭の上に構成されていた植生とは全く一変した状況になる。



鋼路湿原の谷地坊主群

温根内地区にある最大の高層湿原は広いところで幅約〇・五キロメートル、長さ四キロメートルをこえる規模のものであるが、湿原全体では一〇カ所、おおむね凹地域にまとめてみることもできる。まず、プールと呼ばれるりもする浅く水をためた小さい凹地はヤチスゲやコタヌキモ、サンカクミズゴケ、ヒメミズゴケ、スマガヤなどがわずかに生育するが、このプールをとりまく、イボミズゴケやムラサキミズゴケの緩やかな小丘は、きまつたようにホロムイソウ、モウセンゴケ、ツルコケモモなどの生育地である。

鋼路湿原では、このイボミズゴケ丘生成の次の段階として、高く盛り上がるチャミズゴケ丘が見られ、上部をエゾイソツツジ、ガンコウラン、ツルコケモモ、ヒメシヤクナゲ、ホロムイソウツジなどがすき間なくおおうような状態になつて、ここでの極相を思わせる群落ができている。この群落は高層湿原の中で圧倒的に広い地積にわたっているので、エゾイソツツジ・チャミズゴケ群落として植生の一つを代表する。盛り上がり大きい場合、プールの水位面から五〇〜八〇センチメートルの高さにまでなるから、夏季にはかなり乾燥している。

スゲ類には前述した水域のヤチスゲのほか、ホロムイソウ、ワタスゲ、ホソバオゼヌマスゲ、ヤチカワズスゲ、ミガエリスゲ、ムジナスゲなどがあり、ホロムイソウが優占する。ワタスゲともかなり大きい隆起叢生になるから、盛り上がったミズゴケ丘とつらなつて地表の凹凸を一層不規則にする。

低層湿原の植生と違つて、ヒメシヤクナゲ、ツルコケモモ、ヒメツルコケモモ、コケモモ、サワラン、トキソウ、ツマトリソウ、ミツバオウレンなど高層湿原のミズゴケ丘の小さい植物たちは花の美しさでも広く知られ、五月下旬頃から六月にかけては、エゾイソツツジやワタスゲの開花と重なつて非常に多彩になる。それに加えてホロムイソウやチャマンネンズギ、モウセンゴケ、コタヌキモ、ムラサキミカキグサなども生長しかけてるので、湿原の植物観察には好適な季節になる。

現在、それ程大きいひろがりは見せていないが、エゾイソツツジやガンコウランの生育するチャミズゴケ丘の上を大小の斑紋状に灰白色のハナゴケがかぶさつているところがある。一見して周囲の植物にそぐわないので奇異の感を抱かせるが、乾燥した丘塊の上部で見られる現象で、一度このハナゴケにおおわれてしまうと、その下の植物はやがてミズゴケ以下全部枯死して丘塊自体もつぶれてゆく。そのため盛り上がりつづけていた部分は逆に周囲より低い場所になつて、時には再び水をためて浅いプールに逆戻りする。そうなるを改めて水域を好むミズゴケの生育を開始され、それを足場に長い年月をかけてミズゴケ丘生成への歩みをもう一度つづけることにもなつてゆくので、さまざまミズゴケを主要素に持つ高層湿原の性状というものは決して単純ではないのである。なお現在、鋼路湿原には二〇種に近いミズゴケが生育していることもつけ加えておきたい。